

伝説の勇者、なしこまどん！」

「あれが伝説の緑の勇者、なのですか？」

大きなモニターの前で、赤い女王が溜息を吐きました。

画面に映るのは、地球から徐々に離れつつある、円盤の小型宇宙船でした。

「わかりません、ですが、セリン女王様、伝説の通り、緑の狢犬であることは確かです」

モニターに映し出されたのは、二足歩行の緑の狢犬です。

頭に梨の帽子を被り、胸にはネギを巻きつけ、胸にイチゴ、そして、枝豆のポシエト。

とても不思議な存在です。

「……ビタミン星に伝わる伝説ね、という伝説だったかしら？」

セリン女王がそういうと、赤い衣装と、とんがり帽を被った部下達がモニターを変えました。

モニターに映し出されたのは、とても古い壁画です。

要するな赤い宇宙人が、青い宇宙人達から、沢山の野菜を奪う、そんな壁画でした。

「赤が我ら、アミノ星人、か……青はビタミン星人であろうな……緑の勇者とやらは……こやつか？」

そんな中、緑の狢犬が描かれていました。

部下が答えます。

「ビタミン星が、悪の手により、世界に野菜が失われた時——緑の勇者が青の惑星から現れん、と、伝説には」

「悪の手、であるか……それでは我ら、アミノ星人が悪者であるのだな？」

赤の女王が、ニヤリと不適な笑みを浮かべ、部下は慌てます。

「そ、そんなことはないです！ セリン女王！」

「そんなに慌てなくて良い……それで、緑の勇者の名前はなんていうのだ？」

「名前は——なしこまどん、のようです」

「わっちはなしこまどん！ 助けを求める声が聞こえてうやってきたどん！」

沢山の機械が並ぶ大きな部屋に、なしこまどんの声が響きます。

辺りを見渡すと、なしこまどんは驚きます。

近くの窓に映るのは、青い球体——地球だったのです。

なんと、なしこまどんは宇宙船に乗っているようです。

そこに一人、可愛らしい宇宙人が不思議そうな顔でやってきました。

宇宙人といっても、見た目は人間と大きな違いはありません。

しかし、頭の上に天使のような輪っかがフワフワと浮かんできて、瞳はとても綺麗な青い色をしていました。

青い目に、青い髪の毛、とても活発そうな見た目をしていました。

とても可愛いくて、活発的な印象を受けます。

「……驚いたよ、人間じゃ、ないよね……見たこともない生き物だ」

「君、頭に輪っかが浮かんでいるどん！　まるで天使みたいだどん！」

なしこまどんは、驚き、大きく言いました。

「とーっても、可愛いどん！」

宇宙人は顔を真っ赤にして、照れました。

「そ、そうかな、可愛いかな？」

「可愛いどん！」

なしこまどんは、宇宙人をとても褒めます。

「やめてよ、恥ずかしいじゃん、えへへ」

宇宙人はモジモジと喜ぶ中、なしこまどんは首を傾げます。

「それで、君の名前はなんだどん？」

「ほ、僕の名前は、レチノール！　ビタミン星人のレチノールさ！　気軽にノールって呼んでね！」

「ノールちゃんも、よろしくだどん！」

「なしこまどんが、首にかけているマフラーってなあに？」

「これはネギだどん！」

「長くて、たくましくて……とっても美味しそう！」

「頭に被ってるのは？」

「梨の帽子だどん！」

「先っぽが、丸っこくて、とっても可愛い！」

「その可愛いカバンは？」

「枝豆だどん！　とっても美味しいんだどん！」

「立派な膨らみーとっても大きいね！」

「美味しいどん！　栄養もいっぱいだどん！」

なしこまどんは、褒められて、嬉しくなり、自慢げに自分の胸を叩きます。

「地球って、美味しい物が沢山あるんだね！」

「美味しいんだどん！　ノールちゃんも食べてみたいどん？」

「うん、なしこまどんをここに連れてきたのも、農業が理由なんだ」

「農業が、だどん？」

なしこまどんは首を傾げます。

どうやらなしこまどんがここに連れてこられたのは、なにか意味があるようです。

ノールは目をキラキラさせて、言います。

「うん、僕の星、ビタミン星に農業を広めて欲しんだ」

「ノールちゃんの星にだ〜ん?」

「そう、できる?」

「できると思うんだけど……どうしてだ〜ん?」

「そ、それは――」

視線を彷徨わせ、ノールは顔を赤らめ、青い髪を指で摘みました。

そして、青い瞳をウルウルと輝かせ、小さく言いました。

「お、美味しいもの、たくさん食べたいから」

しかし、声が小さく上手く聞「えません」。

「なんて言った〜ん?」

カア、と、ノールは顔を真っ赤にし、大声で言いました。

「美味しいものが、たくさん食べたいから!」

頬を膨らませて、ノールは言います。

「僕の星にある食べ物、いつも味のないゼリーばかりで、お菓子もあるけど少ないし……」

ノールは両手をしなやかな腰に当て、もう、とほつたを膨らませます。

「もう、つまり、美味しいものを食べたいの!」

顔を真っ赤にし、なしこまどんに訴えています。

「いつも思ってたんだ、果物とか、野菜ってどれだけ美味しいんだろうって」

ノールはなしこまどんの手を掴み、目をキラキラと輝かせました。

「だから、沢山食べたいの!」

なしこまどんは元気に頷きます。

「了解だ〜ん!! 農業のことなら、なんでもお任せあれ〜ん!」

なしこまどんはどんと胸を叩き、力強く言いました。

「ありがと〜なしこまどん!……でも、農業していいって、お父さんとお母さんを説得してね!」

「うん!」

ビタミン星

リオとなしこまどんが乗る宇宙船は、遂に星に着きました。
宇宙船を降りたなしこまどんは、驚きました。

「ここが、ノールちゃんに住んでる星なんだどん？」

「そう、ここがビタミン星さー！」

なしこまどんは辺りを見渡します。

周りにあるのは、でこぼこの大地が広がっているだけです。

家の一つも見当たりません。

「ノールなのかー！」

そうすると何やら、岩陰から一人の宇宙人がやってきました。

その人は、ノールと同じ天使の輪を頭の上に浮かべています。

瞳の色は青く、しかし、体はかなり大きく、首から覗ける筋肉はしっかりしています。

「どこにってたんだー！」

大人の宇宙人は、ノールを見ると、強く叱りつけました。

ノールは困ったように、言います。

「お、お父さん、ごめんなさい、ちよつと宇宙行つてた」

なしこまどんは言います。

「ノールのお父さんだどん？」

なしこまどんは、そう聞きます。

大人の宇宙人は、なしこまどんを見て目を丸くします。

「ノール……この方は？」

ノールは軽くジャンプをし、なしこまどんのことを喜んで紹介します。

「地球から来た、なしこまどんだよー！」

言われて、なしこまどんも、くるりと回ります。

そして、元気に挨拶をしました。

「わっちはなしこまどん！ よろしくだどん！」

ノールのお父さんは、驚いた表情を浮かべて言いました。

「ち、地球からですか！ ようこそはるばるこんな惑星まで……」

ノールは、なしこまどんの手を取り、自慢気に言います。

「なしこまどん！ この人は僕のお父さん、コパラミン……つまり、コパラって言うんだ！」

とても嬉しそうに、ノールは両手をブンブン回し、コパラに言いました。

「僕がなしこまどんを連れてきたのはー僕たちの星に、美味しい野菜とか果物を育てたいんだ！」

その言葉に、コバラは表情を強張らせた。

「……ビタミン星に、農業を……か」

空を仰いで見て、一つ溜息を零しました。

「その考えはとても素晴らしい」

コバラは中腰になると、ノールの肩に手を置き、少し微笑みました。

「自分から考えて、行動するこれは、誰にでもできることじゃない」

ノールは気恥ずかしそうにしながらも、胸を張りました。

「えっへん、当然さ」

ノールの反応を見て、コバラはしばらく、考えている様子。

そして、ふうと、溜息を一つ。

「そうか……まさか、ノールが連れて来るとは……しかし、伝説は本当だったのか」

「ど、どうしたんだもん？」

なしこまごんは静かに見つめられ、頭を傾げました。

ノールも、首を傾げます。

「おとーさん？」

「いや、なんでもない……それよりノール、お父さんに何か言うことはないか？」

「はえ？」と、ノールが目をぱちくりする中、なしこまごんは気付きます。

コバラの表情は柔らかく、しかし、その裏にはなんとも言えぬ圧がありました。

ノールは悪いことをしてしまったでしょう。

「え？ 無いよ？」

しかし、ノールは元気にそう返します。

あわててなしこまごんは言います。

「——も、もっと考えてみろよ」

そういうと、リオはポンと手を叩きます。

「あ、わかった！ 勝手にお父さんのお菓子食べたこと？」

「……美味しい野菜を育てる、とても素晴らしい考えだ、健康になれば、強くなれるからな」

しかし、コバラは両手に腰を当て、怒ってしまいます。

「だが、いつもいつてるだろう！ 勝手に宇宙船を使うなど！ それに勝手にお菓子を食べたのか！」

げ、と、ノールは肩を震わします。

「助けてよ、なしこまごん」

ノールはなしこまごんに抱き付き、助けを求めました。

「なしこまごんさん、いちごへんげ」

コバラに連れられ、なしこまごんは、ノールの家にやってきました。

なしこまどんはおどろきます。

「おつきなお部屋だどん！」

その扉の先は、とても広い大部屋が広がっていました。

天井に吊るされた、沢山のシャンデリアに、並べられた本の数々。

外に何も無かった光景が嘘のようです。

ノールがいます。

「凄いでしょ！ それより見てて！」

ノールが手をこ招くと、突如、並んでいた椅子が宙に浮かび、近づいてきました。

近づいてきた椅子にノールは飛び乗り、空を旋回して見せます。

まるで魔法です。

「ど、ど、どなってるんだどん?」

なしこまどんも、これには言葉を失いました。

驚くなしこまどんを見て、ノールはふふん、と、得意げな表情を浮かべます。

「僕達、ビタミシ星人は、超能力を使えるんだ！ これでね！」

得意げに、頭の上を浮かぶ青い輪つかを指差しました。

どうやら、頭の上を浮かんでいる輪つかに秘密があるようです。

「ノール！ 無闇に両能力を使うのは……！」

「大丈夫だって！ 全然元気だし……ってあれ?」

突如、青い輪つかが点滅し、ノールの動きが止まります。

宙を舞っていた椅子の動きも止まり、ノールはガクリと項垂れました。

「ね、眠い」

その言葉を最後に、糸が切れたようにぐったりとし、落下を始めたノール。

なしこまどんはノールを抱き抱えようと走ります。

「あ、危ないどんっ！」

なしこまどんはトテトテと走ります。

しかし、到底間に合いそうにありません。

「あらあら、ビタミシ不足かしら〜？」

地面と衝突する寸前で、ノールの体が突如止まりました。

空中を浮いていて、不自然に浮いているのです。

誰かが、超能力を使ったのでしょうか。

「あらあら、ビタミシが足りなくなつたのね〜、あれだけ危ないって言ったのに、あら〜」

なしこまどんが驚いている中、別の扉が開く音がします。

「あらあら〜、いらつしやい、ノールちゃんのお友達かしらね〜？」

その時、別の扉から、もう一人、宇宙人が姿を現しました。

腰まで流れる青い長髪と、肌白い肌の少女でした。

瞳は閉じているのか、開けているのかわからない糸目で、瞳の色はわかりません。

ですが、しっかりと少女の視線は感じ取れます。

体はリオよりも小柄ですが、頭に浮かぶ天使の輪は、一回り大きいです。

「そんなに見られると、恥ずかしいわ〜うふふ」

その少女が、片手をゆつくりと下げます。

すると、ノールの体もゆつくりと降り始め、この現れた少女が超能力を使っているのがわかりました。

「ノ、ノールちゃん大丈夫だもん!」

なしこまどんは、ゆつくりと降りてくるノールを抱き抱えます。

容態を軽く確認しますが、特に怪我はないようです。

しかし、なしこまどんは驚きます。

ノールは、静かに寝息を立てており、眠っていました。

「そんなに心配しなくても大丈夫より、超能力を使って、ちよつと疲れちゃったのね〜」

目の前の少女は、そう言いました。

その少女は、なしこまどんの腕の上で寝息を立てるノールにとても似ています。

なしこまどんは質問します。

「ノールの妹さんどん？　ありがとうだもん!」

そういうと、少女はおおらかに微笑みます。

「あらあら、私もそんなに若く見えるかしら〜、嬉しいわ〜」

少女の方を掴み寄せ、コバラが笑って言います。

「違いますよ、なしこまどんさん、彼女はノールの妹じゃありません」

目の前の少女は、頭を深々と下げ、礼儀正しく言いました。

「私はカルシフェロール、ノールの母親です、気軽にカルシ、と呼んで下さいね〜」

びつくり仰天。

なんと、目の前の少女は、ノールの母親だったのです。

「つまり、コバラさんの奥さんなんだもんね!」

「あらあら、そんなに驚いてしまって、うふふ、うふふで可愛いわ〜」

コバラが言います。

「気にしないでください、カルシはよく間違われるんです」

長髪を靡かせ、柔らかくカルシは笑います。

確かに、体こそ小柄ですが、所作からは大人が持つ上品さがありました。

「うふふ、別にいいんですよ〜気にしなくても〜」

それ、より、とカルシは、なしこまどんに近づきます。

カルシは、なしこまどんを観察するように視線を行き渡らせ、あらあらと口を抑え、カルシは言います。

「あらあら〜本当に緑の勇者が実在するなんて、驚きだわ〜」
なし「まどんは首を捻ります。
「勇者っ、わっちがだ〜ん？」

伝説の勇者？

ノールは寢室に運ばれ、一方 なしこまどんは、コパラとカルシと円卓を共にしています。

「……ノールちゃんは大丈夫なんだとん？」

そう聞くと、コパラとカルシは頷きます。

「ええ、暫く眠れば、大丈夫です、ノールちゃんったら、なしこまどんさんの前だから張り切っちゃったのね」
「どうやら、大事には至っていないようです。」

そのことに安心しつつ、なしこまどんは聞きます。

「それで、どうしてノールちゃんは倒れたんだとん？」

その問いに、コパラが答えます。

「それは、ビタミン不足が原因です、私達、ビタミン星人は、超能力を使う時、ビタミンを使うんです」

「ビタミンって、野菜に沢山含まれている、栄養素のことだとん？」

「あらあら、物知りなのね」

しかし、なしこまどんは頭を捻ります。

「確か、ビタミンにそんな力ないどんよ？ ビタミンは確かに、体が丈夫になったり、免疫力が上がったり、ホルモンバランスを整ええたり、肌が綺麗になったりするんだけど……でも、超能力が使えるようになるなんて聞いてないどん」

野菜から沢山摂取できるビタミンですが、そんな不思議な力が使えるとは聞いたことがありません。

ですが、ノール達は人間ではありません。

ふと、なしこまどんは言います。

「もしかして、その輪っかが超能力を使えるようになってるんだとん？」

なしこまどんの問い掛けに「コパラは頷きます。」

「明察です、なしこまどんさん、地球人と私達、ビタミン星人の体の構造はかなり類似点が多いですが……決定的な違いを挙げるなら、頭の輪っかです、私達はこの輪っかを通して超能力を行使しています」

「なしこまどんさんはどうも利口ね」

なしこまどんは嬉しくなります。

そんな中、なしこまどんの頭に一つの疑問が浮かびます。

「そういえば、このビタミン星には、果物や野菜がないって……ビタミン星人も、野菜や果物は大切なんじゃないんだとん？」
おかしいです。

確かノールは、ビタミン星には果物や野菜がないと言っていた筈です。

だから、なしこまどんに農業を広めて欲しいと。

「ビタミン星に畑はあるんだとん？ 見かけなかったどんよ？」

しかし、ビタミン星の大地は見渡す限り、畑らしきものは見られませんでした。

ビタミン星人には、ビタミンたっぷりの野菜が必要不可欠なのではないか、そう思わずにはいられません。

「……なし」まどんさんに、話さないといけないことがあります」

コハラは表情を深刻なものに変え、卓上の上でこめかみを揉みほぐしました。

数年前、ビタミン星には、色とりどりの果物と野菜があつたそうです。

ビタミン星人はみんなで協力をし合い、農業をし、沢山の野菜と果物を食べ、幸せに暮らしていました。しかし、ある日、ビタミン星に危機が訪れました。

宇宙からアミノ宇宙人という異星人が現れ、ビタミン星を占領してしまったそうです。

アミノ星人の女王、セリン女王は、ビタミン星人に農業の一切を禁止してしまったそうです。

その日から一変、ビタミン星人は美味しい食べ物食べられなくなってしまいました。

そして、ある言い伝えがあるそうです。

ビタミン星に危機が訪れた時、緑の勇者が現れると。

そして、それがなし」まどんのようなようです。

なし」まどんが思うよりも、問題は重大のようです。

「つまり、ビタミン星の人達は、農業をしないというより、できない状況に置かれているんだよね……それに、わっちが勇者なんだって？」

ただ農業を広めるだけでは、根本的な問題は解決しないようです。

「そこの、そのお陰で超能力を使えなくて困っているわ」

カルシは、困ったように頭を悩ませました。

「お陰で、生活は不便なの、それに、野菜や果物が無いから、美味しいものも食べられないし、お料理もできなくなっちゃったのよー 農業も楽しめなくなっちゃったしー」

加えてコハラが言います。

「少しは、超能力は使えるんですが……でも、ビタミンを使い果たすと、ノールのようになってしまっんです」

「ノールちゃん、今回なんて、ビタミン星から出て、勝手に地球に行っちゃったみたいでー」

「そ、そうなんだよね」

なし」まどんは、苦笑いを浮かべます。

好奇心沢山のノールには、行くことのできない場所は魅力的に見えるのでしょう。

伴い、行動力も相応に高いらしく、一人で宇宙船に乗りビタミン星を出て、そして、地球からなし」まどんを連れてくるだけがあります。

「で、でも、一つ、心配だもん」

なし」まどんは小さく言いました。

「本当に、わっちは力になるんだもん？」

なし」まどんは話を聞いて、頷きます。

「勇者、なんて言われたんだけど……わっちができることなんて、農業の仕方を教える事ぐらいだもん」

なしこまどんは力にはなりたいです。

しかし、自分にできることはないのではないか、そう思ってしまったのです。

勇者、なんて言われても、大層な事はできないように思っつのです。

「それと、透明霊体状態になることができるだけだどん」

「透明霊体状態？」

「コバラとカルシが首を傾げたので、なしこまどんは透明霊体状態になって見せます。

瞬間、なしこまどんの姿が消え、二人は顔を見合います。

「今のなしこまどんには、これぐらいしかないどん……超能力なんて凄いいことできないどん」

「そんなことないと思いますが……それに、超能力が使えるからといって、全て上手くいくとも限りません」

「コバラが微笑み呟きます。

「その通りよりそれに、無理にとは言わないわー、嫌なら嫌って言うていいのよー？」

カルシが優しく言います。

「代替、私達、ビタミン星人の問題なんですから、ねーアナタ？」

「その通りですなしこまどんさん、大体、ノールが勝手に連れて来た訳ですしー」

「……ちよつと考えさせて欲しいどん」

なしこまどんはそう答えました。

確かに自分ができることなんてないように感じます……ですが、なしこまどんは断りたくはありません。

それでも力になりたいと思うのです。

暫く、辺りに悪い雰囲気立ち込め始めた頃、ヒラヒラとカルシが手を上げました。

「なしこまどんさんー、ノールちゃんが寝ている間にー、長老に挨拶に行きませかー？」

「長老だどん？」

「ええービタミン星人のリーダーのような存在ですー、それに気になっているんですよー？」

うつすらと開く、カルシの瞳はなしこまどんを捉えます。

カルシは思考を読んだかのように、言いました。

「それに、長老に会えばー、何か手掛かりを掴めるかもですしー」

なしこまどんは頷きます。

「そうさせて貰うどん」

「長老なら、私達よりも詳しく伝説を知っていますからー、ね、アナター？」

カルシがそう言うのと、コバラは顔を青くしていました。

「た、確かにそうだが……」

「どうしたんだどん？」

そんなコバラを気にかけて、なしこまどんは言います。

すると、コバラは頬に汗を浮かべ、唇を強く噛みます。

深く息を吸い、吐いて、コバラは言います。

「わ、私がノールの様子を見ておくから……カルシは、なしこまどんさんを案内してー」

「……カ、カルシがなしこまどんさんと一緒に行ってくれ、代わりにノールの世話は私が見よう」

「アッナッタ〜？」

しかし、カルシは、コパラに迫り、笑顔で肩に手を置きました。

「ノールの様子は私が見ておくから、挨拶も兼ねて、行った方がいいんじゃないかしら〜？」

「わ、わかったよ」

コパラは肩を落しながら、困ったように笑いました。

「な、なしこまどんさん、行きましょう」

「もしかして、コパラは長老さんが苦手なんだもん？」

うぐ、と、コパラは唸り、視線を彷徨わせます。

どうやら凶星のようです。

「昔のコパラはね〜、今のノールみたいに、やんちゃで〜、私のお母さんの長老に色々、面倒見て貰ったのね〜」

どうやら、ノールの活発さは父親譲りのようです。

コパラは苦虫を噛んだように、項垂れて言います。

「いやはや、お恥ずかしい限りです、カルシの母親である長老には、色々と面倒を見てもらいました」

顔を上げ、コパラは微笑んで言います。

「昔、私はノールと同じだったので……だから、わかるんです、ノールの気持ちは、色んな場所に行つて、冒険をしたいって

気持ちは……父親としては心配でたまりませんが」

コパラとカルシの顔が少し明るくなります。

ですが、まだ表情に驕りがあり、ビタミン星の問題に巻き込んだことが、まだ気掛かりのようです。

なしこまどんは、笑顔で振る舞います。

「それと、カルシさん、これは非食べてどん！」

なしこまどんは、机の上に腰に掛けた枝豆のポシエットから、一回り大きな箱を取り出しました。

するとコパラとカルシは、目をまん丸にしました。

なしこまどんが取り出した箱は、どう見ても、枝豆のポシエットより、大きかったからです。

「不思議なポシエットですね、そんな大きな箱が入るなんて」

「不思議ね〜、中身がどうなっているって聞くのは、野暮かしら〜？」

なしこまどんは黒い鼻を高くして、胸を張ります。

「想像にお任せするどん！ その箱に入っているのは、ビタミンが豊富な食べ物だどん！」

話から聞くに、ビタミン星人達は、どうやらビタミンの摂取量が少ないようです。

なら、美味しい果物や野菜をプレゼントするのが一番でしょう。

孤高の女王

孤高で、誇り高い赤の女王は、いつものように、真っ赤なドレスに身を包み、退屈そうに王座に腰掛けています。アミノ星人の頂点にして、最も尊敬されるセリン女王は、モニター越しに、なしごまごんを見ました。そして、慌ただしく行き来する赤の兵隊にセリン女王は言いました。

「ねえ、緑の勇者は何をしているのかしら？」

「はっ！ 偵察機からの映像を見るに、恐らくピタミン星の長老と接触しようとしているのかと」
忙しく動く、部下達に、セリン女王は退屈そうに続けます。

誰も彼も、自分のことばかり。

仕事が忙しいと言っているのでしょうか。

しかし、誰も自分を見てくれない、セリン女王は、少し悲しい気持ちになりました。

「……それで、トリプトファンはまだ来ないのか？」

「も、申し訳ありません！ もう少しお待ちくださいーもうすぐー」

その時、ガシャン！ と、金属が擦れる重い音がし、玉座の間が、シンと静まりました。

部下達はそれぞれ、手を止め、部屋に訪れた兵士に、目を白黒させています。

「女王よ、お呼びか？」

セリン女王の前で、恭しく頭を下げるのは、一人の屈強な兵士です。

体は周りの部下よりとても大きく、まるで動く大きな巨像のようです。

褐色の兜と分厚い鎧に身を包んでおり、腰には大きな縦と、剣を携えていました。

部下達は圧倒され、各々の作業すら忘れ息を呑む中、セリンは愉快に笑い、彼を歓迎しました。

「トリプトファン元帥遅かったではないか？ 退屈だったぞ？」

「申し訳ない、少し野暮用が……」

「貴公のことだ、また、鍛錬でもしたのであろう？ しかし、感心するぞ、アミノ星人で最強と名高い其方であってもまだ強さを求めるのだな？ 謙虚なものだ」

トリプトファン、アミノ星人の中でも最強と謳われる、兵士の一人です。

修行やら鍛錬が大好きで、どんな時でも、体を鍛えている戦士であり、セリン女王が最も信頼を置く存在です。

「とても無い、拙者としてまだ、まだ未熟、無力です」

「そんな訳なからう、かつて、アミノ星に降り注いだ隕石を、その身一つで破壊し、救ったではないか」
「だとしても、です」

トリプトファンは、厳かに言い放ちました。

「結局、拙者一人では、アミノ星を救うことはできませんでした……拙者にもっと力があればー」

「その話はよせ、貴公のせいでは無い……それに、我はまだ、故郷を諦めてはおらぬ」

セリン女王は、モニターを指差し、言います。

「トリプトファン元帥よ、この緑の狒犬を見よ」

重い兜の視線がモニターに向くのと同時、少しして、トリプトファンの感嘆の声が聞こえます。

「……ビタミン星に伝わる、伝説の勇者ですな？」

「その通りである、名をなしこまどんと言ったか……さて、貴公を呼んだ理由は、説明しなくとも良いな？」

セリン女王の問いに、トリプトファンは、静かに頷きます。

「伝説の勇者と、対峙しろ、と言っているんですね？」

「その通り、勇者がどのような力を有しているのか未知数である、偵察機で密偵をしているが……勇者がどのような力を
持っているのかは分からぬ……だが、わかったことは、勇者は莫大なビタミンエネルギーを有していること」

もう一度、モニターに映るなしこまどんを、セリン女王は見ます。

「あの狒犬が、ですか」

食い込むように、部屋のモニターに映るなしこまどんをトリプトファンは見ます。

「言いたい事はわかるぞ……あの可愛いのが伝説の勇者とは思えぬ……伝説の勇者と言われる割には、愛嬌こそあるが
……とても我々の脅威には見えぬものだ」

セリン女王がそういうと、トリプトファンは言います。

「何事も見掛けで決めつけてはいけません、ビタミン星人さえ、個々が超能力による強大な力を持っていたのです」

「わかっておる、だからこそ、貴公を呼んだのだ、戦士の勲とやらは、なんと言っておるのだ？」

「そうですね、実際に会ってみないことには——」

トリプトファンはそれっきり、考え込み、沈黙してしまいます。

痺れを切らしたセリン女王はいきなり切り出しました。

「もう良い、貴公に聞きたいのは、一つ——勝てるのだな？ 誰も傷つけずに」

「それは分かりませぬ」

トリプトファンは笑って言います。

幾多の戦場を駆け抜けたトリプトファンといえど、断言はできないようです。

「ただでさえ、ビタミン星人には不自由を強いているのだ……これ以上は、苦しめたくない」

セリン女王は玉座にもたれかかりながら、ボロリと呟きます。

「今、計画は大詰めに差し掛かっている」

セリン女王は、モニターに映るなしこまどんを指で刺し、言いました。

「そして、あの勇者からは、強大なビタミンエネルギーを観測した、つまり、あの勇者は、私達にとっての希望でもあるのだ
捕まえるのだ」

立ち上がると同時、玉座の後ろのタイルが動き、下へ繋がる階段が現れました。

セリン女王は立ち上がり、踵を返して言います。

「勇者を捕まえれば、大量のビタミンエネルギーが手に入る……これで、アミノ星を救えるの」

ビタミンエネルギー、ビタミンを凝縮した、強力なエネルギー。

最も、セリン女王が欲している物です。

「了解しました、セリン女王」

「うむー頼むぞトリプトファン元帥、全ては、アミノ星を生き返らせる為に」

セリン女王は歩き始め――

「……セリン女王よ、お一つ、よろしいかな？」

セリン女王の足が止まります。

「良い、許す」

セリン女王は、背中を向けたまま、そう答えました。

「我々は、ビタミン星の植物からビタミンを抽出し、あの機械に集結させた後、それを使いアミノ星を救う……それがセリン女王が成そうとしている計画、そうでしたな？」

「あの機械の名は『ライフハート』である、名前ぐらい覚えぬか」

思わず、セリン女王は苦笑を浮かべてしまいます。

トリプトファンはやはり機械が苦手のように、名前も覚えていないようです。

「申し訳ない、そういった機械なるものに疎く……兎も角、話を戻しましょう」

トリプトファンは真剣な剣幕で続けました。

「とある、風の噂を耳にしまして……そのライフハートなる機械、暴走の危険性があると」

セリン女王は黙り込み、暫く答えません。

これを肯定と受け取ったトリプトファンは、もう何も聞きません。

「……もう、我は引き返せぬのだ、故郷を救う以外の選択肢はない」

セリン女王は振り返ると、寂しく笑いました。

「それとも、トリプトファンよ……昔のように我を止めてくれるのか？」

ただ、トリプトファンは、強く拳を握ります。

「――やはり、拙者は無力ですな」

「仕方あるまい、星を砕けても、壊せぬ物もあるだろうて、ままだらぬ物よな、人生とは踵を返し、セリン女王は階段を降り始め言いました。

「トリプトファン元帥よ、緑の勇者を確保するのだ、全ては我らのアミノ星の為に」

暫く階段を下ると、湿度が上がリ、セリン女王の頬がしっとりと濡れ、しかし、気にせず進みます。

様々な機械の、唸り声が聞こえ始め、ついに目的地につきました。

部屋を中心に、静かに頓挫する巨大な球体。

心臓のように脈動する機械を見上げ、セリン女王は祈りました。

「――これがあれば、アミノ星は、救われるのだな」

もう少しで、ライフハートがビタミンエネルギーを集められます。

ビタミン星から奪った野菜や果物から抽出するビタミンエネルギー――

しかし、あと少し足りません。

「これで、アミノ星は、私の故郷を、救うことができるのかな？」

故郷を救う為に、悪にもなったセリン女王は、確かな覚悟を持っています。

しかし、どうしても胸の中で不安が木霊し続けます。

祈るように、セリン女王は言いました。

「さて、緑の勇者とやら、我を止めてみるが良い」

「ん？ 誰かの声がした？」

助けを求める声が聞こえたような気がして、なしこまどんは空を見上げます。

見える空は美しい星が宝石のように散りばめられています。

とても美しいです。

なしこまどんはしかし、胸に湧き上がってくる悲しい感情に、もう一度空を見上げます。

「どうしました？ なしこまどんさん？」

コバラが足を止め、そう聞いてくるので、なしこまどんは答えます。

「大丈夫だん」

「お疲れではありませんか？ 集落までもう少しですから」

「まあ、ちょっとだけ疲れただん、結構遠いだんね」

「ええ、元々、私達ビタミン星人は農業を営んで暮らしていましたから……あ、見えてきましたよ」

なしこまどんと、コバラは進んでいきます。

ですが、なしこまどんは不安です。

自分にどんなことができるのか、長老に会えばそれはわかるのでしょうか？

でももし、わからなかったら？

そんな不安がプツプツと心に募ります。

「ダメだん！ 暗いことばかり考えるのはダメだん！」

なしこまどんは、そんな不安を払拭するように、強く言いました。

「肩の力を抜いて大丈夫ですよ、私の方が緊張しているので」

「……ふふ、そんなに怖いんだん？」

「いえ、そんな事ないです、とても優しい人です……滅多に怒らないですから」

話を聞く限り、とても優しい人らしいです。

「でも、奇想天外な人です……、でもビタミン星のみんなは長老のことが大好きですよ」

「素敵な人なんだんね」

「怒るととても怖いんです……昔、色々と問題を起して、こっぴどく怒られましたから、知っています」

「どんなことしたんだん？！」

二人が再び歩き出したのを見て、岩陰からノールは姿を現しました。

そして一つ、安堵の息を漏らしました。

「ふうう、なし」まどんにバレたのかと思った」

息を殺しながら、二人が行く先の道を進みます。

「……こんな時間に、どこに行くんだろ？」

ノールは目を覚ました後、なし「まどんと」パラが家を出ていくのをひっそりとみていました。

隠し事をしているに違いない。

そう考え、家を抜け出し、二人を追跡してみれば、どうやら向かう先は長老の居場所のようです。

「一体、僕のおばあちゃんに何の用があるんだろ？」

長老

「さて、お主が、言い伝えの勇者なのじゃな？　ダハハッ！」

と、座布団の上で、胡座をかく少女は、瞳を大きくかつびらき、豪快に笑います。

「……人を見た目で判断するのは、悪い事とんけど……本当に、あの少女が長老なんだん？」

「まあ、言いたい気持ちは、分かります」

同じく隣で正座をする「パラは小さく苦笑しました。

なじこまどんは自分の目を疑います。

どうしても、目の前にいる長老と呼ばれるビタミン星人は、どうみても少女なのです。

カルシよりも小柄で、とても長い長髪は、川を描くように部屋の畳に流れています。

そして、頭の上に浮かぶ輪っかはとても大きいです。

長老の家にいる前、他のビタミン星人達をみてきましたが、彼女の輪っかは他を圧倒してしまう程の大きさを誇っています、規格外というに相応しいでしょう。

「なんじゃ、妾の美貌に見惚れおったか？　ガハハ！」

豪快に笑う少女に、コパラは笑って答えます。

「いやはや、お久しぶりです、長老」

「なんじゃ、コパラ坊、そんなしけた表情しておって……まあ、そうじゃな、勇者殿、名をなじこまどんと言ったか？」

しかし、不思議です。

目の前の彼女は、カルシよりも小柄な体をしています。

ですが、なじこまどんには、彼女が他の誰よりも大きく、尊大に見えました。

「そうだどん！　わっちはなじこまどん！　よろしくだどん！」

なじこまどんは立ち上がり、クルリと一回転し、意気揚々と言います。

「元氣じゃな！　いい事だぞ！　うむ、では、妾も名乗るのが礼儀じゃな！」

そういうと、彼女はどっこいしょ、と立ち上がり、両手を組んで言います。

「妾は、ビタミン星人の長老にして、アイドルートコフェールであるッ！　アイドル名はロールじゃ！」

「アイドルだどん！」

なじこまどんは目を輝かせます。

しかし、对象的にコパラは、顔を窄めて言います

「……今度は、アイドルですか？」

「なんじゃ？　コパラ坊、妾がアイドルになるのが気に食わないのじゃ？」

慌ててコパラは首を振ります。

「い、いえ、長老は可愛いですし、アイドルになれますよ！」

「当たり前じゃー！」

「でも、前回は科学者になるって言って、宇宙船を開発したじゃないですか……また、ビタミン星に変革を齎すつもりなんですか……また、変なことして、村人を巻き込むつもりじゃないですか？」

「別にいいじゃろう？ 新たな文化は取り入れる方が脆いじゃ、それに、その宇宙船の一つをプレゼントしてやったじゃろっ？」

さらりと簡単に言うので、なしこまどんは驚きました。

「あのUFOを開発したのは、ト「フェロールさんなんだもん？」

なしこまどんが最初に載せられたUFOのことでしょう。

なしこまどんは驚きます。

「ロールでいいじゃ、ま、その通りじゃ、妾は天才なのじゃ！ ダハハッ！」

なしこまどんの驚いた反応を見て、ロールは満足しているようです。

暫く豪快に笑い飛ばし、ふう、と一息を吐きました。

そして、再び座布団に腰掛け、胡座をかくと、に、と歯を覗かせました。

ギザギザな歯が、キラリと光り、瞳を大きく開けば、猫のように長細い瞳孔が覗けます。

「それで、お主らがここに来たのは、伝説を聞きに来たのじゃろう？ それに、アミノ星人が何故、農業を禁止にしたのかを聞きに来た、こんなところじゃな？」

見事、ロールは、なしこまどんがここに来た理由を当てて見せました。

「ど、どうしてわかったごん？」

「妾が凄くからじゃーだがまあ、野菜と果物が食べられなくなつてから、かなり力は制限されているが……まあ、問題はないじゃろう、全て「こ」が上手くいってもつまらないじゃろう？」

なしこまどんは直感しました。

ロールという存在は、自分が思うよりも強大で、予想ができないことを。

だからこそ、彼女は長老という座に就いているのでしょーう。

クルリと、ロールは指を回すと、勝手に襖が開きます。

そして、何かが書かれた大きな壁画と、赤い箱が宙を浮かんでやってきました。

「ち、長老……無闇に超能力を使うのは……」

慌てて、止めようとするコペラに、ロールは豪快に笑います。

「案ずるでない、妾は他の奴とは鍛え方が違うのじゃー。少ないビタミンであっても、効率良く超能力を使えるから問題はないのじゃーそれより、説明してやろう、伝説についてじゃ」

「結論から言うのじゃ、なしこまどん、お主は、強力なビタミン力を秘めているのじゃ」

ロールは宙に浮かぶ壁画を指差し、どこからか取り出した扇子を仰ぎながら言います。

「伝説を簡単に言えば、ビタミン星に危険が迫った時、緑の勇者が、平和をもたらす……それだけじゃ」

幾らか資料らしき書類が宙を浮いて流れては、収納され、あつという間に襖の奥に戻されてしまいました。それきりロールは話を止めました。

驚いたコバラが言います。

「ち、長老……も、もっと、具体的な情報は……」

「ないのじゃ」

キッパリと言われ、コバラは狼狽します。

「だが、案ずるでない……一つ、確かなことがあるのじゃ」

扇子を『シリと畳んだノールは、なしこまどんを見て、轟然と言いました。

「なしこまどんには、莫大なビタミシエネルギーが眠っておる」

「ビタミシエネルギーだどん？」

「そうじゃ、妾も驚いたのじゃ、なしこまどんが持つビタミシエネルギーはとても強力、個人が持つには、余りに強大じゃ」

なしこまどんは自分の体を見えます。

自分の中に『ビタミシエネルギーなるものが、沢山あるようですが、不思議と自覚はできません。

「お主、人間や普通の生物の類ではないじゃろう？ 我も人の事を言えぬが……お主、一体何者なのじゃ？」

何者か、そう言われて、なしこまどんは声を上げます。

「わっちはなしこまどんだどん……それ以上でも以下でもないどんよ!!」

なしこまどんは、必死に言います。

「……」

しかし、怪しんでいるのか、少し警戒しているロールに、なしこまどんは慌てて言います。

「そんなえらい存在じゃないどん、結局は、わっちは誰かが困っているなら手を差し伸べたいだけなんだどん！」

「偉く謙虚な姿勢じゃな……じゃが、妾は、気に入ったぞ、ガハハハ」

ローラは、突如笑い出しました。

そして、目尻に浮かぶ笑い涙を、小さな指で拭い、小さく微笑みました。

場の雰囲気と和ますように、ロールはまた笑いました。

「すまぬな、辛気臭い雰囲気にしてしまったのじゃ……それよりも、なしこまどんよ、地球の出身と言ったのじゃ？ 地球

では、農業は発達しているのじゃろう？」

「……地球のこと知ってるどん？」

「細かいことは良いじゃろう？ そっちの農業はどうなのじゃ？」

「地球の農業は、みんなが協力し合って、農業をやってるどん！」

「そうか、それは良い事じゃ……」

「それでだどん……ビタミシ星のみんなにプレゼントがあるんだどんっ！」

なしこまどんは思い出し、腰に掛けている枝豆のポシェットを弄り始めました。

すると幾つもの箱を取り出しました。

なしこまどんは、ロールに箱を手渡しました。

「ほう、これは有り難いのじゃ、さて、箱の中身は……なんじゃ、これ？ 赤い果物？」

「母だどんっ！ 『うちおとめ』っていう、とっても美味しい果物だどん！」

「ほう、とちおとめとなっ」

「他にも、『さちのか』っていうのもあつて、どれもおすすめだもんっ」

なし「こまどんは、他にも沢山の箱を取り出し、長老にプレゼントします。

「不思議なポシエットですね、なし「こまどんさん、ポシエットよりも大きな箱がたくさん出てきて」

「コバラに褒められ、なし「こまどんは嬉しくなり、元氣よく言います。

「今渡した物達は、農業で育てられた、ビタミンたっぷりの野菜や果物だもん！」

なし「こまどんは、山のように積み重なった箱の前で自信満々に言います。

「どれも美味しくて、ビタミンたっぷりだもん！」

「そうか、感謝するのじゃー！ コバラよ、他の物に配ってきてはくれぬか？」

「わ、私ですか？」

「そうじゃ、とちおとめとさちのか、という母は置いていくのじゃ、それ以外は、村の者に配って欲しいのじゃ」

「わ、分かりました」

「コバラは慌てて、山積みになった箱の前に移動しました。

箱の前で一息、コバラは息を吐くと――

「ふんぬッー」

体の筋肉が膨張し、服がキツそうに悲鳴を上げました。

胸のボタンが幾つか弾け飛び、厚い胸板が覗けた頃――コバラは軽々と箱達を持ち上げました。

「力持ちだどんっ！ すこいどんっ！」

なし「こまどんは目を輝かせます。

目の前のコバラは二回りも大きくなり、まるで別人のようです。

重そうに山積みになった箱を肩に担ぎ、コバラは小さく笑います。

「と、おとや」

「ほれ、無理をするでないのじゃ」

バランスを崩しかけた、コバラにローラは超能力を使いました。

「力があつたとしても、バランスが取れなければ危ないのじゃ……暫くは妾の超能力で筋力をカバーしてやるのじゃ」

「で、でも、それじゃ、長老の負担に……」

「問題ないのじゃ、さっさと行くが良い」

「あはは、ありがとうございます、では、行ってきます」

ズシン、ズシンと、一歩動く度に振動が響きます。

軽く頭を下げ、コバラは部屋を出て行きました。

コバラの姿が見えなくなっても尚、足音の振動が響いていました。

部屋が静まった頃、突然ローラが言います。

「……いつまで隠れているつもりじゃ？ もう、コバラ坊は外に行ったのじゃ、安心して出てくるのじゃ」

ローラは、なし「こまどんより更に奥に視線を送り、平然と言います。

なしごまどんは、後ろを振り返ると、とある少女が襖から姿を現しました。

「どうしておばあちゃん、僕がいるってわかったの？」

現れたのは、目をまん丸にして驚くノールでした。

「えっさ、ほいさ」

山積みになった荷物を肩に担いだコハラは、外に出るなり、開放感から、胸を撫で下ろしました。

ノールはとても良い長老です、小さい頃から沢山お世話になりました。

しかし、何もかもを見透かされてしまい、先んじて行動を牽制されるのは、コハラは小さな頃から苦手であり、今でも苦手意識があります。

しかし、長老の事は大好きです。

長老はとても優しく、いつもビタミシ星人全体のことを考え、行動をしてくれているのですから。それに、いつも誰かが困れば助けてくれます。

だからこそ、ビタミシ星人は、皆んな、長老のことが大好きです。

「にしても、本当に凄いな……」

ろくにビタミンを摂っていないのにも関わらず、超能力を平然と扱っていること。

人の心を読むような発言に、災害が訪れる前は先んじて策を打っています。

まるで、未来を見ているかのようです。

「でも、最近、何か、余裕がないように見えるな……」

元々、波乱万丈な性格をしていましたが、最近の彼女は特にそうです。

前なんて、ビタミシ星人全員が乗れる宇宙船を作ると、躍起になっていました。

結局は、何人かが乗れる幾つかの宇宙船を作れました。

今思えば、その時から少し落ち込んでるように思えます。

コハラは決心します。

もし、悩み事があるなら、今度は自分が力になろうと。

「――？」

ふと、気づきます。

空に、赤い彗星らしきものがあつたのです。

それは、徐々に迫ってきているような気がして、不安になり、目を凝らします。

コハラは超能力を使い、肉眼を強化して、彗星を確認して、気づきました。

巨大な赤い鎧を被った、何者かが、迫ってきているのです。

背後には、幾つもの赤い宇宙船を連れています。

そして、目を疑います。

空の向こうに、巨大な宇宙船が、静かに姿を現していたのです。

それは、小型機械惑星で、大気圏に頓挫する姿は、まさに圧倒でした。

星を砕く戦士、トリプトファンを筆頭に、アミノ星人が現れたのです。

力を合わせて

「妾の前で隠し事など無用じゃ、それも、最愛の孫となれば尚更じゃ」

ニマリと笑うロールは、そう言います。

なしこまどんは驚きます。

「ノールちゃんだもん?」

そこに居たのは家で寝ていた筈のノールでした。

「っ、っついてきちゃった」

「ダメだどん! ちゃんと安静にしてなきゃいけないどん!」

なしこまどんは必死に言います。

「ごめん、なしこまどん……でも、気になっちゃって……それに体なら大丈夫だよ!」

ノールは元気よく両肩を回して見せます。

「元氣一杯だから、僕!」

「……本当だもん?」

「僕は丈夫だつて! なしこまどんは心配性だな」

便乗して、ノールは言いますが……

「と言っても、無理は禁物じゃ……まあた、勝手に抜け出しおつて……体の丈夫さだけでなく、破天荒な所は相変わらずじやのう」

「え、えへへへ、」めんなさい」

なしこまどんは、ふと思えます。

破天荒な所は、ロールも同じなのではないかと。

「なんじゃ、なしこまどんよ……何か失礼なことを考えてはおらぬか?」

「そ、そんなことないどん! それより、どうぞだどん! 母美味しいどんよ!」

隣では、クウと、ノールのお腹が鳴る音がなっています。

見なくても分かります。

顔を真っ赤にして、ブルブルと小刻みに震えている、ノールの姿が。

「そうじゃな……二人とも、好きに食べるが良いのじゃ」

ロールが超能力を使ったのでしよう。

二つの箱が、なしこまどんとノールの前に移動しました。

そして一人でに箱が開き、中から真っ赤な母が現れました。

「ロールさんは食べなくていいんだもん?」

「妾は後でいいのじゃ、それに、孫とその友が美味しく食べている姿を見るのが一興なのじゃ」

なしこまどんはとちおとめを口にします。

瞬間、口に広がる甘さ、それをしっかりと支える酸味絶妙なバランス。

口の中には果肉の良い食感が広がり、思わず口角が上がってしまいます。

噛めば噛むほど、口の中を潤わせる果汁に、思わず舌はとろけてしまいます。

「……」

ノールもとても気に入った様子です。

頬を赤く染め、身を振るノールは、恍惚として倒れました。

「ノールちゃんはとっても気に入ってくれたみたいだね」

次から次に母を口に入れるノールの姿を見て、なしこまどんは心がポカポカします。

「……そうじゃな、それに、それだけ食べれば、ビタミンも暫くは事足りるじゃろうー食べている間で良いのじゃ、話をし
てやるのじゃ、アミノ星人がどうして、我々から農業を奪ったのかについてじゃ」

ふと、ノールの手が止まり、顔を顰めます。

「……」

「……そういえば、ノールちゃんは知らなかったどんね？」

なしこまどんは、知っていることを説明しました。

ビタミン星は、農業が発達しなかったのではなく、禁止されていたこと。

それと、自分が伝説の勇者であることをです。

「なしこまどんが、勇者……それに、ビタミン星は農業を禁止されていた……もう、許さない！ アミノ星人達から農業を
取り返してくる！」

ノールは勢いよく立ち上がると、外に出ようと走り出しましたが……

「……あれ？」

ノールの体は宙に浮き、足だけがジタバタと動いています。

ロールの超能力のようです。

「話を最後まで聞くのじゃ……そもそも、アミノ星人がどこにいるのかもわからないじゃろう？」

「あ、そっか！」

言うなり、ノールは足を止め、ロールは苦笑を浮かべながらも、超能力を止めました。

「アミノ星人がどうして、ビタミン星の農業を禁止しているのか、教えて欲しいどん！」

「言われなくともわかっておるのじゃ……まず、何から話すべきか、最初はアミノ星人は、巨大な宇宙船に拠点を構えてお
るのじゃ、そして、アミノ星人達の目的は、アミノ星を取り戻す事じゃ」

突然、轟音が鳴り響き、部屋全体が大きく揺れました。

「うわっ！ どうしたんだろ！ 僕、外見てくるね！」

ノールが慌てて外の様子を見ようと走っていきます。

なしこまどんも、一緒に見て行こうとすると――

「なしこまどんよ、話があるのじゃ……少し、二人で重大な話を、じゃ」

ロールは、今までになく、表情を真剣な物に変え、言いました。

「なし」まどん、お主に頼みがあるのじゃ……宇宙船で、逃げてはくれぬか？」

無数の小型宇宙船が、空を覆い尽くしていました。

そして、あまりにも圧巻な小型機械惑星は、まるでスケールが違います。

「女王である我が命する——此処に、緑の勇者を捉えるのだ！」

兵士が次々に女王の指示に従い、ビタミン星に無数の小型宇宙船が迫ります。

セリン女王は、玉座の上でそれを悠然と眺めています。

「……セリン女王！ その、トリプトファン元帥の連絡がないのですが」

そんな中、部下の一人が、報告をします。

「安心するのじゃ……トリプトファン元帥なら、宇宙空間から、その身一つでビタミン星に向かっている」

「——今、なんと？」

「案ずるでない、トリプトファン元帥なら、傷一つつかぬ」

セリン女王は平然と続けました。

「トリプトファン元帥は、必ず先陣を切って行動をするのだ、あやつのごとく、敵の戦意を削いで、犠牲なく勝利を収めるつもりなのだろう……」

トリプトファン元帥は、誰よりも強く、そして、犠牲を嫌う戦士です。

味方兵士はおるか、敵兵士にさえ情を持つ、戦に生まれながらして、誰よりも穏やかな戦士。

しかし、部下の不安な表情を見て取ったセリン女王は言います。

「では何故、宇宙船で行かないで、わざわざ生身で行くのか……そう言いたい顔だな？」

「は、はい、セリン女王様」

「あやつは昔から、生粋の機械音痴でな……それに——その方がかっこいいと思ってるの」

セリン女王は、笑って言いました。

「き、急にどうしたんだとん？」

「未来に待つのは、絶望じゃ」

「——どういう事だとん？」

「そのままの意味じゃ、妻の力を持っても、覆せなかった絶望じゃ……妻は何度も未来を見て、何度も試行錯誤をした、誰も傷付けず、幸せな結末に辿り着こうとしたのじゃ……じゃが、妻の力だけでは無駄じゃったのだ」

「……絶望だとん？」

唐突な話に、なし「まどんは少なからず驚きます。

「そうじゃ、なし」まどんよ、お主はビタミン星に農業を取り戻しにきてくれたのじゃな？」

「そうだとん、でも、それがどうして、絶望に繋がるんだとん？」

なし「まどんは、そう聞き返すと、ローラが言います。

「——妻は何度も未来を見てきた、そして、何度も危機を未然に防いできた」

ロールは、語り出しました。

「アミノ星人が我々から野菜や農業を奪ったのは、ライフハートという機械にビタミンエネルギーを集める為なのじゃ」

「ライフハートだどん？」

「その通りじゃ、ライフハート、言わば、奇跡を引き起こす機械じゃ」

「ど、どういふことなんだどん？」

なしこまどんは、混乱して、そう聞き返すと、ロールは答えてくれました。

「ビタミン星人の頭に浮かぶ、輪っかがあるじゃろう？ それは超能力という奇跡を引き起こしているのじゃ、ライフハートはその模造品じゃ」

「つまり……ビタミン星人の頭の輪っかを再現した機械が、ライフハートという訳だよね？」

「その通りじゃ、じゃが……問題は、ライフハートの安全性じゃ……結論から言っと、ライフハートは不完全なのじゃ、使えば今まで溜められたビタミンエネルギーが暴発するじゃろう……」

小さく俯いて、ロールは続けます。

「そして、今、アミノ星人は、このビタミン星に、一斉に集まってきているのじゃ」

「さ、さっきの振動も、アミノ星人によるものなんだどん？ でも、どうしてどん！」

なしこまどんは目を白黒させていると、ロールは重い言葉で答えます。

「なしこまどん、お主の中に眠るビタミンエネルギーを狙ってじゃ、そして、お主が捕まれば……ライフハートは起動してしまふのじゃ」

「そ、そうなんだどん」

なしこまどんは、首を傾げて聞きます。

「……わっちが逃げたら、ライフハートは起動しなくなるどん？」

ライフハートが起動しなければ、最悪の事態は免れる、そうなのかと、なしこまどんは言います。

「そういう訳でもないのじゃ、いずれ、アミノ星人はビタミンエネルギーを回収し、起動するのじゃ」

ロールは、悲しく笑いました。

「妾がどうにかしようとも考えたのじゃが……下手に干渉すると、ライフハートが暴走してしまう可能性がある……無闇に干渉はできなかったのじゃ」

ロールは唇を噛んで、言いました。

「だが、攻めて、ノール、コバラ坊……そして、妾の娘であるカルシには逃げて欲しいのじゃ、妾が開発した宇宙船なら、逃げ延びることが可能なのじゃ」

「だから、宇宙船を開発したんだどんね？」

どんな気持ちだったのでしょうか。

危機が迫っているのを、知り、一人で抱え込むのは。

どれだけ辛かったのでしょうか、なしこまどんには到底想像できません。

「結局、ビタミン星全員を乗せる宇宙船は作れなかったのじゃ」

ロールは情けないと言わんばかりに、寂しく項垂れ、ゆっくりと視線を向けてきます。

そして、ただ、なしこまどんに懇願します。

「頼むのじゃ、攻めてあの三人と一緒に逃げて欲しいのじゃ」

「……なるほどぞん」

ようやく、なしこまどんは理解しました。

コハラは言っていました。

例え超能力が使えても、全てが上手く行く訳ではないと。

なしこまどんはよく知っています、世の中の理不尽は、どう頑張っても、解決できないことがある。

それは超能力が使えたとしても、立ち足はかかる不条理は、とても強大なのです。

頑張れは一人で解決できる事もあれば、きつとそうではない時もあるのでしょうか。

ならば、どうするべきか――なしこまどんは、ふと、気づきました。

「……そう言えば、どうだったぞんね」

どうして忘れていたのでしょうか。

なしこまどんが見守ってきた人間は、どのように困難を乗り越えてきたか。

「それで、やってくれるのじゃ？」

口を閉ざしたなしこまどんに、ロールは弱々しく尋ねます。

なしこまどんは即答します。

「嫌だぞん」

なしこまどんは、理解しました。

訪れる理不尽にどう立ち向かうか。

「わっちにできる」と言ったら……誰かを全力で手伝うことくらいだぞん」

なしこまどんは、ロールに言います。

「諦めちゃダメだぞん！ 最後は皆んな幸せになる、そんな結末がいいんだぞん！」

「……」

「問題解決して……皆んなで、農業をするぞん……そして、皆んなで美味しい果物と野菜を食いたいんだぞん」

なしこまどんはもう迷いません。

自分が勇者であることなんて、どうでも良かったのです。

ただ、強く決意しました。

「……力を貸して欲しいぞん」

なしこまどんは、笑っています。

「それに、ロールさんに、地球のおいしいもの、まだ食べてもらってないぞん」

「……立ち向かうつもりなのじゃな？」

「だって、知ってるんだぞん」

なしこまどんは知っていました。

希望の見出し方を。

「な、何これ」

ノールは驚きました。

目の前の大地は大きく抉れ、あちらこちらに砂埃が舞っています。

それに、空を見上げれば、空一杯に広がる赤い宇宙船の数々。

その後ろに轟然と鎮座する、巨大な星に見間違う球体型の宇宙船があります。

そして、何より――

「小さき者よ、拙者はトリプトファン元帥、アミノ星人の軍隊の最高責任者である……」

ノールが見上げてようやく、トリプトファンの全貌が拝めます。

まるで巨像のような、迫力に、腰に携える巨大な武器。

まさに圧巻と言えるでしょう。

「君達の目的はなんなのさ、ビタミン星に何の用？」

しかし、ノールは怯みません。

「ほう、拙者を前に気後れしないか……中々に見所があるな」

「当たり前さ、それより、君達の目的はなんなのさ？」

「そうであるな、伝えるべきだろう――拙者達、アミノ星人は、なしこまどんの身柄を確保してきた」

「――なら、嫌だ、なしこまどんは僕のだもん！」

ノールは言うなり、両手を振り上げます。

「ほら――っ！」

すると、辺りに散乱していた大小様々な岩石が、浮かび上がり、ノールを囲うように並びます。

それを見たトリプトファンは、ただ感嘆の息を漏らすばかりです。

「ほう、其方の超能力、かなり強力であるな……昔、戦ったビタミン星人を思い出す」

記憶を懐かしむように、トリプトファンはいいいます。

「へえ、そのビタミン星人と僕、どっちの方が強そう？」

「……それが、前のビタミン星人の方が強いだろう」

「へえ、後悔させてあげる――」

岩石が一斉に動き出し、トリプトファンを覆い尽くします。

「ふん、話にもならなかったね」

ノールは得意げに笑いますが――

「その程度であるか？」

「はえ？」

次の瞬間、岩石が砕け散り、トリプトファンが肩を鳴らして現れました。

「拙者を拘束すには、余りに生ぬるい」

そういい、手に持った岩石を握り潰し、パラパラと手から砂となり、風に乘って消えてしまいます。

「う、嘘だあ」

ノールは舌を巻きます。

まさか、岩石を「うもあつさり破壊される」とは思わなかったのです。

「さて、そろそろ終わりであるか？」

「う、うわああああー！」

ノールはひっちゃかめっちゃかに、岩石を飛ばします。

しかし、その尽くがトリプトファンの拳に打ち砕かれてしまいます。

「これだけであるな？」

ノールは驚きます。

気が付けば目の前に、トリプトファンが接近していたのです。

「あ、うわああああ、離せー！」

トリプトファンはその大きな手で、ノールをすっぽり掴んでしまいました。

ノールは必死に身を振りますが、全く動けそうにありません。

「離せー！」

「そう暴れるな、大人しくするのだ、怪我はさせぬ」

「いーやーだー、はーなーせー！」

「では、なしこまどんの身柄を……！」

瞬間的に、トリプトファンは身を振ります。

「き、きやー！」

「しまったー！」

その際に、トリプトファンの手から滑り落ちてしまったノール。

地面に衝突してしまう寸前。

「キャッチだどんー！」

かろうじて、駆けつけたなしこまどんがノールを抱き抱えました。

「なしこまどん？」

「だ、大丈夫だ、どん？」

「あ、うん………というかいつからにっ！今さっきまでいなかったのにっ！」

息も切れ切れに、なしこまどんがいました。

「と、透明霊体状態だどん」

「半分霊体状態……よくわからないけど、凄いな！忍者みたい！」

「忍者、知ってるどんね………」

なしこまどんとノールは、急いでその場を離れます。

「い、今の攻撃は……」

トリプトファンは、驚いたように、そして身を感激に震わし、上空を見ました。

長い長髪を龍のように靡かせ、宙を浮いている少女がいました。

それはロールであり、笑顔で見下ろしていました。

「……トリプトファンと言ったか？ 久しいのじゃ、どうやら腕は鈍っておらぬようじゃな？」

「トコフェロール殿……やはり、其方であつたか」

トリプトファンは声に隠しきれぬ興奮を馴染ませながらも、必死に平然を取り繕います。

「貴方と再び邂逅する日を心待ちにしておりました……しかし、先の攻撃、前と手合わせした時と比べ、かなり弱くなつたように感じましたが？」

「お主らじやろう？ 勝手に『ビタミン』星から果物や野菜を奪つてのは、お陰で『ビタミン』不足じゃ」

「……なるほど、つまり、『ビタミン』が足りない貴方は大きく弱体化していると言つわけすな……なら手を引いた方がよろしいかと？」

その言葉に、ロールは鼻を鳴らします。

「妾に諦めろというのじゃ？」

「弱体化したといえど、貴方は強い……星を砕く拙者を軽く制圧できるでしょう、ですがー」

トリプトファンは強くなりました。

「また一人で戦うのは、余りに不利ではないですか？」

かつて、ロールは『ビタミン』星人を庇い、一人で『アミノ』星人達と戦っていました。

しかし、流石のロールと言えど、『ビタミン』星人全員を庇って戦うのには限界がありました。

結果引き分けになり、長らく戦いはありませんでした。

「トコフェロール殿は優しすぎる……昔も、貴方一人で我々『アミノ』星人を相手にしましたね……それも、怪我人を一人も出さずに引き分けに持ち込んだ……本気を出せば勝てたでしょうに」

ですが、と、トリプトファンは続けています。

「……その強さには、感服致します、しかし、時には諦めも大切です、星を碎ける拙者でさえ、諦めなければいけないことは必ずありました」

そういい、トリプトファンは凄みます。

対して、ロールは笑って返します。

「確かに、その意見も最もじゃ、何かを諦めなければ、得られぬ物もあるのじゃ……じゃがな」

ロールは腕を組み、強く返します。

「「うとも言つじやろつ？ 絶対に譲れない、勝ち取らなければいけぬ物もあるのじゃ」

「ほう、では、貴方が譲れないものとは？」

その問い掛けに、ロールは天を指差し、言い放ちました。

「全員が幸せになる未来じゃ」

「……その全員に、我々アミノ星人も含まれている、そういう訳ですな？」

「当たり前じゃ、意思疎通ができ、心を通わせられる、であれば、友達になれぬことはないじゃろっ？」

ロールは笑って続けました。

「これが終わったら、一緒に農業を営み、美味しい物を作って食べるのじゃ」

トリプトファンは溜息がてらにいます。

「それができればいいですな、土を耕すのも面白そうです……ですが、セリン女王が、それをお許しになるかですな」

「実に忠実な家臣じゃな……それと一つ忠告じゃ……ライフハートは危険じゃ、女王に、辞めるようにいうのじゃ」

「それはできません……今のセリン女王の心の支えは、ライフハートしかありません、仕方のないことです」

トリプトファンも、ライフハートの危険性については知っていました。

しかし、故郷を失ったセリン女王の最後の頼みが、ライフハートなのです。

ライフハートが危険は承知の上、それでもセリン女王は、故郷を取り戻そうとしているのです。

トリプトファンは、半ば諦めていました。

「だから、選んでください、アミノ星人と共に滅亡するか、それとも、ビタミン星人だけでも助かるか」

「何度も言わせるでないのじゃ、妾はこの力を誰かを傷付ける為に使うつもりはないのじゃ」

溜息がてら、ロールは言います。

「それに、誰が、妾一人で戦うと言ったのじゃ？」

ロールは片手を突き上げると、辺り一帯の岩石が浮かび上がり、それを覆い尽くしてしまいます。

「妾は今まで勘違いをしておったのじゃ、全て、一人で頑張ろうと……だが、緑の勇者に知らされたのじゃ」

ロールは、言います。

「もし、今の自分の力では、足りぬ時、仲間を頼れと、じゃ、農業をやっていた身でありながら、長らく忘れていたのじゃ」

どんな状況に陥ったとしても、困難を乗り越える方法を。

長らく農業をできていなかったからでしょうか。

大変な時に大切なことをすっかり忘れていました。

力を合わせることの大切さを。

助け合って

「なし」まどんさん！「こちらです！」

沢山のビタミン星人に連れられて、なしこまどんとノールは走ります。

トテトテと。必死に足を動かしますが、なしこまどんは今にも転んでしまいそうです。

「な、なし」まどん大丈夫？」

「だ、大丈夫、だ、ドオ、どん」

言葉と裏腹、なしこまどんの顔は真っ青です。

「大丈夫じゃないよ！ 僕が超能力で運んであげるから……」

「そ、それじゃあ、ノールちゃんの負担に、なるドオ、どん」

「なしこまどんさん、私が運びます！」

すると、横からなしこまどんは、米俵のように担がれました。

「あ、お父さん！ 筋肉モリモリになってる！」

それはコハラでした。

筋骨隆々な肉体は軽々となしこまどんを持ち上げ、軽々と走ります。

「……そ、それで、今からどちらに？」

「宇宙船だよ、父さん！」

ノールが答えます。

「宇宙船？ どうしてだ？」

「なしこまどんが、あの、空に浮かんでる、セリン女王？　だっけ、その女王様がいる小型機械惑星に向かうんだって！」

「ど、どういふんですか！」

コハラが度肝を抜かれたような表情を浮かべると、なしこまどんは答えます。

「信じてどん！ わっちに考えがあるどん！」

「……わかりました、長老からも、なしこまどんの補佐を務めろと、言われていますので」

「ありがとうだどん！」

暫く走ると、遠くに見たことがある宇宙船が見えてきます。

最初になしこまどんとノールが乗った、UFOつまり、宇宙船です。

しかし、突然空から、赤いカプセルのような宇宙船が現れました。

『ビタミン星人よ！ 降伏せよ！ なしこまどんの身柄を渡すのだ！』

すると、一緒に付いてきてくれた、ビタミン星人達が声を上げました。

「先に言っていてください！」

「こは私達が食い止めます！」

「美味しい『紅ほっぺ』っていう苺を食べたんだ！ ビタミンは充分です！」

皆んなが超能力を使い、両手を上げると、宇宙船はぴたりと動かなくなります。

『あ、あれ、動かない!』

目の前の宇宙船から悲鳴が上がります。

「ありがとうだもん!」

「コバラ、ノール、そしてなし」まどんはついに、宇宙船の場所まで辿り着きました。

「あらあら、待ってたわよ?」

そして、宇宙船の前で、一人佇んでいたのは、出迎えてくれたのは、カルシです。

緊迫した状況の中でも、彼女は仄々と、微笑み言います。

「私が操縦するわね」

直様四人は宇宙船に乗り込み、出発の準備をします。

カルシは宇宙船の操縦席に座り、おおらかに言います。

「目的地は、あのおっきな宇宙船でいいのよね? ちゃんとシートベルトはつけてね?」

「その通りだ、どん、よろしくだ、どん!」

「え、お母さんが、運転するの?」

「ノール、カルシに運転を頼むしかない……よろしく頼む」

何やら、コバラとノールは顔を青くしています。

なし「まどんはシートベルトをつけながら、二人に聞きました。

「顔が真っ青だもん?」

「……カルシ、安全第一で頼む」

「私はいつだって安全第一よ?」

宇宙船が浮かび上がったようです、窓から見える景色もグングンと空に浮かんでいるのがわかります。

「みんな、シートベルトは閉めたかしら?」

皆んなが頷きます。

それを見て、カルシは、操縦バーを掴み、言います。

「それじゃあ、出発進行」

瞬間、なし「まどんは、体が強く座席に押し付けられます。

途轍も無い重力を感じ、なし「まどんは窓を見て驚きます。

窓から見える景色は濁流のように流れる中、カルシがケロリと言います。

「うふふ、うふふは運転はいいわね、あら、追手かしら? 私を捕まえて、うふふなさい」

一体、外では何が起きているのでしょうか?

なし「まどんは座席にしがみつくので必死でした。

「セリン女王！ 何者が急接近しています！」

セリン女王の部下が、慌てて言います。

「なんなんです！ あの宇宙船！ 我々ともない速度で……我々の精鋭部隊が全く追いついていません！」
慌てて言いますが、セリン女王は慌てていません。

「そう慌てるでない……緑の勇者がここに来たのあろうー」

セリン女王は言います。

「宇宙船のハッチを開けるのだ」

どちらにしても、同じことです。

「そして、我が一人で相手をしようぞ……、皆の者、外の警護に回るのだ」

突撃！

「あらゝ勝手にハッチが開いたわゝ異かしらゝ？」

と、言いながらも、カルシは迷うことなく、宇宙船を操作し、パッチの中を進んでいきます。

宇宙船を降り、なしこまどん達が進みますが――

「止まるのだ！ 侵入者！」

しかし、一斉に物陰から現れた赤い兵士達に囲まれてしまいます。

「あらあらゝ、困ったわねゝ？」

「どうしよう、なしこまどん！」

「こんな時は……これだどん！」

なしこまどんは、腰に掛けていた枝豆のポシエットから、ある物を取り出し、掲げてみせました。

それは、到底ポシエットに入り切らないだろう、大きな箱です。

中にぎっしり募っているのは……たわわに実った大きな果実、林檎でした。

「……これで見逃してどん！」

なしこまどんは、トテトテ、とはこに一人の戦士に林檎の箱を渡しました。

「これはなんだ？」

一人の兵士が、喉を鳴らして林檎を手に取り出しました。

言わずもがな、それは賄賂です。

「ふざけるな！」

兵士が林檎を投げようとしたので、なしこまどんは必死に止めます。

「あわわ！ 食べ物を粗末に扱っちゃダメだどん！ 農家の人が泣いちゃうどん！」

なしこまどんは兵士を止め、必死に懇願します。

「……一口だけ、食べて欲しいどん！」

「わ。わかった、だから、そ、そんな目で俺を見るな……」

兵士が困ったような表情を浮かべる中、隣にいたもう一人の兵士が、林檎をひよいと持ち上げ、齧りました。

「……あ――美味いっ！」

口にした瞬間、一人の兵士が悶絶しました。

それを見て、周りの兵士が生唾を呑み、興味深々に箱の中を覗きます。

「……俺も食べてみたい」

「やめろ、列を乱すな！ 兵長命令だ！」

「……でも、美味しそうじゃ無いですか！ 俺、黙ってみてられないっすよ！」

一人の兵士が、箱に近づきます。

「お、俺も」

「俺もー」

すると、みるみる内に、隊列が崩れてしまいます。

「こらーっ！ 隊列を乱すな」

必死に一人、リーダーらしき兵士が号令を掛けますが、もう、崩壊は止まりません。

なしこまどんはトドメを刺しにいきます。

「兵長さん？ も、どうぞだどん！」

なしこまどんは、うさぎ斬りにした林檎を、アーンと、突き出します。

「わ、私は、兵長として……」

しかし、好奇心には勝てないようです。

あ、あーと、ぎこちなく口を開いてーっついに口にしました。

「うっっ！ 美味しいっ！」

遂には、兵長さえ陥落してしまいました。

兵士と兵士の林檎の争奪戦が繰り広げられる中、なしこまどん一行は、騒ぎに紛れて、進みます。

「でも、どこに女王様がいるんだどん？」

なしこまどんが困る中、とある兵士に林檎片手に言います。

「女王様にも林檎をプレゼントするから、どこか教えてどん！」

「大きな道を真っ直ぐ行けば辿り着きます！ 林檎をくださいっ！」

「どうぞだどん！」

「やったーアー！」

嬉しそうに飛び跳ね、兵士はどこかに去っていきます。

こんなに兵士達が喜んでくれるとは、なしこまどんも嬉しいです。

セリン女王を説得したら、もう一度兵隊さん達にプレゼントしようと決心します。

暫く、道を進むと、警報が鳴り、赤いランプが部屋全体に行き渡ります。

『侵入者発見、警備ロボットを始動します』

道の端から続々と、巨大な人形ロボットが現れ、またもや取り囲まれてしまいます。

様々な光線銃を手にするロボットに囲まれてしまい、またもやピンチに陥ってしまいます。

「降服シナサイ！ サモナイト、ビリビリ光線銃デ、ビリビリサセマスヨ」

「ど、どうしよう、なしこまどん！」

「……こは、私達に任せて、なしこまどんさん、ノールは、先に進んでください！」

「そうね、こは私達二人でなんとかするから」

カルシが、軽く手を振ると、前を塞いでいたロボット達が吹き飛びます。

「あ、あんなに重そうなロボットを……お母さん凄い！」

「あらあら、そうかしら私のお母さんと比べたらまだだよ」

そんな中、一人のロボットが光線銃からビリビリビームを撃ちます。

ビリビリ光線は、真っ直ぐカルシに向かいますが……
「ふんっ！」

しかし、それを、故^レパラは逞しい腕で受け止めてしまいます。
「カルシは私が守る！」

「あらあら、かっいいいわ、もつと言って頂戴？」

うっとり、カルシがいうと、コ^レパラは、耳を真っ赤にしました。
「と、兎に角、なしこま^レどんさん、先に行ってくださいー！」

咳払いを一つして、コ^レパラは続けました。

「ノール、頼むぞ！ なしこま^レどんと一緒にお願いします！」

「……うん！」

ノールとなしこま^レどんは走り出しました。

廊下を暫く走ると、豪勢でとても大きな扉が見えてきました。
高さだけでも、なしこま^レどんの背丈の十倍はあるでしょうか？

「僕が開けるよ、なしこま^レどん」

ノールが両手を開き、大きく息を吸います。

「う、うくん、ちよつと重いけど……」

ノールの超能力のお陰でしょう、少しずつ扉が開いていき――

しかし、途中から扉は微動だにしなくなってしまうです。

なしこま^レどんは、ノールを見て悟ります。

ノールの表情は苦しそうで、どうやら精一杯なようです。

「わっちも協力するどん！」

なしこま^レどんも加勢します。

必死に扉に体を押し当て、顔が真っ赤になるまで力を出します。

「う、うくん」

「も、もう少しだどん！」

すると、少しずつ扉が開き、なんとか一人が通る隙間ができました。

なしこま^レどんとノールは、その隙間をなんとか入り込み、中に入りました。

中に入ると、互いに肩に寄り掛かり、一汗拭きます。

「やったね、なしこま^レどん」

「た、大変だったどん」

互いに笑い合い、立ち上がると、ふと、部屋に凜とした声が響きます。

「いえば、開けてやったというのに、よく開けたのだ」

「セリン女王！ もう辞めてどん！ ビタミン星を自由にしてどん！ それに、ライフハートの起動は危険だどん！」

なしこまどんは必死に訴えます。

ですが、セリン女王には届いていないようです。

「はて、ライフハートの情報がどこから漏れたか……まあ、良いだろう、しかし、ライフハートを知っているのであれば話は早いのだ」

セリン女王は、義務的な口調で、どこか冷やかに言います。

「緑の勇者よ、その内に秘めている膨大なビタミンエネルギーを、分けてはくれぬか？」

「ダメだどん！ ライフハートは危険なんだどん！ 使っちゃダメだどん！」

「女王様！ 僕からもお願い！ ライフハートとか、よくわかんないけど、危険なんですよ？ 使ったら怒られちゃう！ 代わりにお菓子あげるから！」

今一状況を理解していないノールも、必死に言います。

なしこまどんは思い出します。

ノールには状況説明を殆どしてなかったことを。

何もわからないのにも関わらず、なしこまどんを信じてついて来てくれているのです。

そう気持ち、なしこまどんは、とても心強く思います。

「皆さんで、美味しい農作物を一緒に食べようどん！」

なしこまどんは、バタバタと手を振り、必死に言います。

きつと話し合えば、セリン女王も辞めてくれる筈です。

「いいだろう」

二人の意見を聞いて、セリン女王が深く頷きます。

「……ほ、本当だどん？」

喜ぶのも束の間、セリン女王は言いました。

「私の故郷である、アミノ星を救える、確実な代替案があるのであればな」

「……アミノ星を救うってどういうこと？」

ノールは首を傾げ、聞きます。

セリン女王は、深く溜息を吐くと、静かに語り出しました。

「アミノ星は、我々のかつての故郷の星である……今はすっかり荒廃してしまったがな」

「荒廃、だどん？」

「……仕方なかったことだ、大きな火山が噴火し、大地は火に吞まれ、空は、厚い黒煙に包まれ、太陽の恩恵を失った……今でこそ火山は沈静化したか、大地は枯れ果て、太陽の光を拝むことはできぬ、氷の星になってしまったのだ」

セリン女王は、どこか諦観したような表情で、憂鬱に語り続けます。

「我々は小型機械惑星に乗り込み、長い事、宇宙を漂った……我らの星を取り戻す方法を探しての、そこでビタミン星を見つけたのだ」

「……それで、ライフハートを開発したんだどんね？」

「その通りである……しかし、アミノ星を元に戻す為には、膨大なビタミンエネルギーが必要でな、協力してくれるか？」

「何度も言うけどん、ダメだどん……ライフハートは危険だどん！　こんなこと辞めてどん！」

「……それもわかっておる、成功する可能性は限りなく低い」

「な、なら……」

なしこまどんが言いますが、セリン女王は首を横に振ります。

「確率論であれば、ライフハートを捨てるのが賢明であろう……だがもし、限りなく低い確率だとしても……アミノ星が救える可能性があるとしたら、我はそれに賭けたい」

セリン女王は、玉座を立つと声を上げます。

「ライフハートを起動せよ」

号令と共に、強い振動を感じました。

「な、なんだどん！」

狼狽するなしこまどんが狼狽する中、気付きます。

下から玉座を押し上げ、上がってくる巨大な機械を。

緑色に光る巨大な球体が、銀の台座の上で浮かんでいます。

「姿を見るのは、流石に初めてであろう？　これが、ライフハートだ」

様々な管に繋がれ、囁々と唸り、脈動する機械は、まるで生きているようです。

「……一つ、教えてやろう」

アミノ星人は、ライフハートと管で繋がる赤い機械を被り、ながら言いました。

「人の心は、合理性では動かぬのだ、例え、成そうとしていることが、どれだけ不合理で、不確実で、非効率だったとしても、おかしいものよな」

機械のヘルメットがピコピコと起動し始め、何やら不穏な雰囲気立ち込めます。

「それでは、無理矢理にでも、ビタミンパワーを貰うとするぞ」

セリン女王が片手を挙げると、突如、床のタイルを穿ち、巨大な植物の蔓が聳え立ち、触手のようにうねります。

「危ないっ！」

触手が大きく揺れたと思うと、勢い良く、なしこまどんに迫り

なしこまどんは、驚き、身を固めますが……

「！」

なしこまどんが目を開けると、触手が寸前で止まっています。

「う、うう」

ノールが超能力を使って止めていてくれたらしいです。

しかし、ノールは必死に歯を食いしばり、汗を沢山掻いています。

「ノ、ノールちゃん！」

「ほう、受け止めたか……これは予想外であるな……流石長老の孫と言ったところか」

「なし」まどん、止められない！ 逃げてっー」

頷き、なし「まどんは必死に走ります。

「もう、限界——！」

ノールの超能力から解放されたのでしょう、植物のツタが勢い良くなし「まどんに迫ります！

「だどんっー」

なし「まどんは躓き、ドテンと転んでしまいます。

しかし、それが功を成したのでしょうか、ツタがなし「まどんの背中ギリギリを通り過ぎていきます。

そして、一人でに体が浮き、どこかに勢い良く引き寄せられます。

「はて、姿を隠したか」

なし「まどんが、モニターの前で羅列するコンピュータの裏にいました。

目が周り、グルグルとなし「まどんの視界は揺らぎます。

「……なし「まどんしっかりしてよー！」

そんな中、耳元にノールの囁き声が聞こえます。

視界が正常に戻った時、なし「まどんは気がきます、ノールが心配そうに顔を覗き込んでいる事に。

「ノ、ノールちー」

「しー！ 静かにして、見つかつちゃうー！」

なし「まどんは口を塞がれ、コクコクと頷きます。

「それで、なし「まどん、これからどうしよう、まさかセリン女王が超能力を使えるなんて……」

うーんと、なし「まどんが考えます。

「……セリン女王の超能力は、ノールちゃんから見て、どうなんだとん？」

「え？ えーと」

ノールは暫く考える素振りを見せた後、あ、と声を漏らします。

「……そう言えば、上手く扱えてなかったよ！ まだ慣れてないってこともあるんだろうけど、まだまだ使い勝手が悪そうだったよー」

なし「まどんは考えます。

どうすればこの状況を打破できるのでしょうか？

「多分、セリン女王が超能力を扱えるようになったのは、頭に被る機械の影響だと思っどん」

なし「まどんは考えます。

そして、ある案を思い付き、ポンと両手を叩きます。

「ノールちゃん、超能力で、機械を操ることはできるどん？」

「え、で、できると思っけど……」

なし「まどんは、頷き、言います。

「今から作戦を説明するどん」

「……遅かれ早かれ、捕まるというのに、随分と粘るものだ」

セリン女王が、溜息を吐くと同時、部屋の照明が一斉に消え、あたりに暗闇が広がります。
光源の一つもなく、本当に真っ暗です。

「停電を起した所で、ライフハートが止まる訳なからう……無駄なことだ」

「……セリン女王、話を聞いて欲しいどん」

すると、少し遠くに直立するなしこまどんが現れました。

セリン女王は、少し黙り込み、一つ、溜息を溢します。

「何度言えばわかるのだ……我は辞めるつもりはないと」

「でも、セリン女王は本当はこんなことしたくないどんよね？」

「……何故、そう思うのだ？」

セリン女王は、眉根をびくりと動かし、聞き返します。

「だって、みてて、悲しそうだどん、セリン女王も、本当はこんなことしたくない筈だどん！」

「……」

「否定はしないどんね？」

セリン女王は頷きます。

「否定はしない、我も本当はしたくないのだ……誰かに迷惑をかけたくはない、だが、我はアミノ星人の女王としてもやらねはいけない責務があるのだ」

「……そのライフハートが、セリン女王を苦しめているんだどんね？」

「遠回しに言えば、そうであらうな」

「なら、解放してあげるとん」

「……やってみるが良い、だが、その前に――」

「きゃっ――」

セリン女王はツタを動かし、闇に紛れていたノールを掴み取りました。

「ありやりや、バシちゃった？」

ノールが困ったように笑います。

「意識を勇者に向け、その間に、我とライフハートの接続を切ろうと画策していたらしいが……これで終わりじゃな」
セリン女王は、触手を伸ばし、言い放ちます。

「勇者よ、そのビタミンエネルギーを吸収させて貰うぞ」

残ったツタが、直立するなしこまどんに勢よく襲い掛かり――

しかし、触手はなしこまどんを捕まえられませんでした。

伸ばされたツタは、不可思議な壁にぶつかってしまいます。

「何――と？」

「わっちはなしこまどんだどん！ちゃんと名前と言ってどん！」

瞬間、背後に回り込んでいたなしこまどんは、セリン女王が装着していた頭の装置を取り外し、言いました。

「これで、わっち達の勝利だよね？」

使用者との接続を切られたツタは、消滅し、拘束されていたノールが体を伸ばして言いました。

「やったね！ なしこまどん！」

「……なるほど」

セリン女王は、溜息混じりに、続けました。

「あそこ写っているなしこまどんは……モーターに映したなしこまどんなのだな……部屋を暗くしたのは、それを悟られない為であるな」

「その通り！ 凄いでしょ！ なしこまどんが考えたんだよ！」

ノールが自慢げに言います。

「我の負け、か」

少し寂しげに、俯きセリン女王は呟きました。

先程までの覇気が嘘のように消えて、もぬけの空のように無気力です。

ガゴン！ と、部屋全体が大きく揺れ動き、振動が続きます。

「ど、ど、どなってるん？」

「……まさか」

セリン女王は、モーターの近くの機械に近づき、何やら「E」の調へ「E」を始めました。

そして、顔を青くして、呟きました。

「ライフハートを使った反動で、機械に故障が発生したらしい……、自動操縦が機能しない」

「っ、つまり、ど、ど、どだ、どん？」

「この宇宙船は、あと十分ほどで、ビタミン星と衝突するのだ」

「や、やはり強い」

「お主も、少しはやるのじゃ、少しは楽しめたのじゃ」

更地と化した一帯で、トリプツファンが片膝をついていました。

「しかとて、トリプツファンよ……お主らの巨大な宇宙船、妾の見間違えでなければ、徐々に大きくなってきているのじゃ？」

「冗談を、そのようなことがあろうはずが……」

空を見て、トリプツファンは絶句しました。

「報告します……」

すると、アミノ星人の兵士が一人、トリプツファンの前に現れ、慌てて言いました。

「我らのアミノ号が、自動操縦が壊れ、ビタミン星に落下してきているとのことですよ！」

「セリン女王は無事であるのか？」

「は、はい、報告によればですが……なしこまどんの説得に応じ……」

「なし」こまどんよ、よくやってくれたのじゃ……いや、しかし、あんな巨大な宇宙船が墜落することになるとは、予想しなかったのじゃ……」

ノールとなし「こまどんは、邪魔にならないように、端っこで、二人蹲っていました。」

「なし」こまどん、僕達どうなるんだろ、怖いよー!」

ノールは涙目になりながら、なし「こまどんにしがみついています。」

「大丈夫だどん、わつちがついてるどん」

そう言い聞かせますが、しかし、なし「こまどんも、どうすればいいのかわかりません。」

「早く、するのだ! 早くシステムを修復するのだ!」

「ダメです女王! 残り四分ではシステムの修復が間に合いません!」

玉座の間にわらわらと集まってきたアミノ星人達は、必死に制御を取り戻そうと慌ただしく行き来しています。

「ライフハートのビタミンエネルギーを使うのはどうでしょう!」

「ダメです! あれは不安定なエネルギーだ! 逆にシステムが崩壊してしまいます!」

「このままでは、ビタミン星に衝突してしまいます」

玉座に、一人居座るセリン女王は、一つ溜息をつき、立ち上がりました。

「もう良い」

セリン女王がそういうと、アミノ星人達の手が止まります。

視線が自分に集中したのを確認して、セリン女王は言いました。

「……地上にいる兵士たちは、ビタミン星人を保護し、一緒に脱出せよ……」ににいる者達も同様だ……近くにある脱出

用のポッドで全員避難し、後から地上の兵士達に回収して貰うのだ」

そして、セリン女王はなし「こまどんに視線を向け、言いました。

「我は、残つて責任を果たそう……時間を稼ぐ」

「で、でも、それじゃあ、セリン女王様は」

一人のアミノ星人が心配そうに言いました。

「元々、全ては我が原因である……ライフハートを使う決断をしたのも、ビタミン星から農業を奪ったのも全て、我の責任であるのだ……罪滅ぼし、という奴だな」

セリン女王は、なし「こまどんとノールに歩み寄り、深々と頭を下げました。

「……すまなかった、今更になつて虫のいい話であるが、謝らせて欲しい」

ノールは、助けを求めるように、なし「こまどんを見ます。

「ノールちゃん、答えてあげてどん」

「……え、えっと」

ノールは、心細そうに、暫く考え込みましたが、何か決断したのでしよう。

強く唇を噛み締め、言葉を綴ります。

「嫌だよ、許したくないよ、僕」

「……そうか」

「だってさ、身勝手な話だよ……僕だけに謝るなんて、ちゃんと皆んなにも謝ってよ！ だから」

ノールはセリン女王の手を握み、強く言いました。

「最後まで、諦めないでよ！ 最後に残るだなんて言わないでよ！ 僕も手伝うから！」

「……？」

セリン女王は、鳩が豆鉄砲を喰らったような反応を見せず、

「わかるよ！ 僕も良く怒られるから！ 謝るのが怖いなら僕も一緒に謝ってあげるから！」

「そ、そういうことではなくてな！」

「なしこまどんも一緒に謝ってくれるよね！」

「勿論だもん！」

なしこまどんが、くるりと周り、元気に言います。

「セリン女王、今わっちらに言っただけで欲しいのは、そんな謝罪の言葉じゃないどん……こんな時、なんていうどん？」

こんな暗い雰囲気、なしこまどんも好きではありません。

だから、元気に言います。

「だ、だが、私は……」

言葉を言いかねていると、アミノ星人が大声を出します。

「セリン女王ずるいですよ！ 一人だけ謝らないなんて」

「そうです！ 俺達にも責任がありますから！ セリン女王一人が背負う必要なんてないですよ！」

「俺達も一緒に謝ってあげますから！」

セリン女王は、息を呑み、驚いています。

「セリン女王は人気だどんね！」

「……皆の者」

セリン女王の頬に涙がボロボロと溢れてしまいます。

「……力を、貸してくれるか？ なしこまどん、ノール」

「勿論だもん」

「勿論！」

なしこまどんとノールは元気に言いました。

『よく言ったのじゃ』

すると、何処からともなく声が聞こえました。

なしこまどん達が振り返ると、モニターには、ガハハと豪快に笑うロールと、ボロボロになったトリプツファンが映っていました。

ロールが声高々に言います。

『ビタミン星にいるビタミン星人には、妾が言っておいたのじゃ、ビタミン星人は超能力を用いて協力するのじゃ』

『拙者は、地上に残った小型宇宙船を使わせ、落下の速度を緩めるように指示を出します……そして、拙者は小型機械惑星を受け止めて見せましょうぞ』

「トリプトファンよ……そんなことできるのか？」

セリン女王がいうと、トリプトファンは、兜の中で笑いました。

『星を砕くのは得意ですが、受け止めるのは初めてですな』

「大丈夫、なのか？」

『流石に、破壊をせずに受け止めるのは難しいですな……出来得る限り、墜落速度を弱めて貰いたい』

「……任せて、いいのだな？」

『ええ、勿論です、今まで、本当の意味で、セリン女王、貴方の助けになれていなかった……名譽挽回をする絶対の機会でありましょう！』

「墜落速度、少しずつ、緩和しています！」

地上から、ビタミン星人達の超能力により、墜落速度が遅くなっているようです。

それにアミノ星人達も宇宙船にロープを括り付け、逆側に宇宙船を動かし、墜落速度を緩めています。

「ですが、まだ足りません！」

「墜落まで、あと三分！」

一団となり、必死に対処しますが、まだまだ足りません。

タイムリミットが迫る中、なしこまどんは必死に考えます。

どうすれば、この状況を打破できるのか……

ふと、ある言葉を思い出します。

確か、あの時、ロールは言っていました、なしこまどんには、莫大なビタミンエネルギーを秘めていると。

「なるほどどん！」

なしこまどんは理解しました。

「ロールちゃん！ わっちのビタミンエネルギーを、みんなに分けて欲しいどん！」

「え、ええ！ 急にどうしたの？」

「わっちが勇者と言われていた理由、わかったどん！」

「……よくわからないけど、わかったよ！ なしこまどん！」

ノールはなしこまどんの手を取り、言います。

『ビタミン星の皆さんに、なしこまどんのビタミンエネルギーを分けてあげればいいんだね！』

「よろしくだどん！」

「でも……なしこまどんは大丈夫なの？」

しかし、ノールはふと思いついたように、不安そうに言いました。

「大丈夫だぞん！ それに、みんなの役に立ちたいだぞん！」

きつとなし「まどんがこに呼ばれたのは、みんなを一致団結させる為だったのしょう。

立ち塞がる理不尽を皆んなで乗り越える為に。

なし「まどんは、今、こにいますのです。

「……わかったよ、なし「まどん、行くよ！」

なし「まどんのビタミンエネルギーを吸収し始めたのでしょうか。

ノールの体が緑に光ります。

「す、凄い！ なし「まどんのビタミンエネルギー！ これだけあれば……！」

ノールは、力を集中させ、ビタミン星にいる仲間に向けて、流し込みます。

「な、なんだこれ！ 力がみなぎってくる！」

「野菜や果物を食べていないのに……どうして！」

「でも、これなら、もっと強い超能力が使える！」

ビタミン星人達は、流れ込んできたビタミンエネルギーを使い、全力を出します。

「……なるほどなのじゃ、なし「まどんの奴、よく考えたのじゃ！ 他の者に「ビタミンエネルギーを託すとは天晴れじゃ！」

ノールは、目を見開き、感心しました。

すると横に並んでいたトリプトファンがゆっくりと言います。

「では、我々の出番ですか？」

「そうじゃな、安心するのじゃ、受け止めた時の反動は、全て妾が超能力を使い、相殺してやるのじゃ」

「ええ、とても助かります……では、いきましようか」

「そうじゃな」

トリプトファンとノールはゆっくりと動き出します。

「墜落速度、大幅に減っています……これなら！」

「まだ、気を緩むでないぞ！ 最後までやり切るのだ！」

相当、ノールは頑張ってくれています。

緑色に光る中、強く瞼を閉じて、必死になし「まどんのビタミンエネルギーを受け止め、ビタミン星の皆んなに流しています。

なし「まどんも、徐々に限界に近づいていました。

自然と息が上がリ、体がとても重く感じます。

「落下まで、六十秒前！」

一秒一秒が、永遠とも思える瞬間の連続です。

なし「まどんの体は鉛のように重く、とても苦しいです。

「三十秒前!」

なし「まどんは、立ち上がるのも大変です。

立っているだけで、もう精一杯に思えました。

「二十秒前!」

ですが、なし「まどんは諦めません。

皆さんで、幸せな結末を迎える為に、齒を食いしばります。

「残り――!」

「なし「まどん!」

ノールが、声を張り上げ、言いました。

「皆さんで、農業をやろうね!」

「――も、勿論だどんっ!」

「衝撃に備えてください!」

ビタミン星の再生

「う、ううん、ど、どうなったどん？」

少しの間気を失っていたようです。

なしこまどんは、立ち上がると、すぐ隣で倒れていたノールの肩を揺さぶります。

「だ、大丈夫だどん？」

「ん、あと十分……む、えへ」

「起きてどん！」

「ううん……あ、そうだ！ どうなってるの今！」

元氣よく立ち上がるノールを見て、一先ず安心します。

どうやら、怪我はないようです。

「わからないどん」

セリン女王も、大丈夫だどん？」

「……大丈夫である」

すると、他の皆さんも大丈夫だったようです。

続々と目を覚まし、外に出ていきます。

「氣をつけてどん？」

「ありがとう、なしこまどん！」

アミノ星人達と共に外に出て、小高い小山に登ります。

どうやら、日の出が近いようです。

夜が徐々に薄れていき、オレンジ色に変わり始めています。

「……」

小山に登って、辺りを見渡します。

空と地上から二つの人影が近づいてきます。

それは、ボロボロになったトリプトファンと、空を優々と浮遊しているロールでした。

「それでは、ライフハートに貯蔵されたいたビタミンエネルギーを返して貰うのじゃ」

コクリと、セリン女王は頷きます。

そして、セリン女王はロールに頭を下げて、言いました。

「本当に迷惑をかけたのだ……申し訳ない」

ロールは、一つ溜息を吐くと、頷きました。

「うむ、まあ、良いじゃろう、色々と言いたいことはあるのじゃが……今はビタミン星を救えた、そのことを素直に喜ぶとするのじゃ……」

「……持って参りました」

ライフハートを拒ぎやってきたトリフトファンを見て、ロールは頷きます。

「うむーそれと、そろそろ夜明けが近いのじゃな」

ロールは何やら考え込み、頷きました。

「そうじゃな、一興として、もうはじめてしまふのじゃ」

「——おばあちゃん、始めるとは、何するの？」

「ノール、よく見ておれ、こんな機会は滅多にないのじゃ」

何かが始まるようです。

「……何が始まるんだとん？」

「まあ、見ているのじゃ」

ロールは言葉を濁し、ライフハートを超能力で持ち上げ、一緒に空に浮いてしまいます。

ある程度、上空に浮かぶと、ライフハートからビタミンエネルギーを抜き出し始めます。

すると巨大な緑の球体が出現します。

それは、凝縮されたビタミンエネルギーです。

「綺麗な夜明けじゃ……野菜や果物が生えればもっと美しいじゃろう」

ロールは、凝縮したビタミンエネルギーを、ゆっくりと、無機質な大地に落としていきます。

大地にそれが衝突した瞬間——

「うわああ！」

「……凄いぞん」

まるで、大地が脈打つかのように植物が生え始め、自然豊かな風景に早替わりしました。

アミノ星人達も言葉を失ったようで、皆んなが驚いて感嘆の声を漏らしました。

「……これで、ビタミン星の本来の姿に戻ったわけじゃ」

「どうしても、綺麗——」

太陽の光が差し込み、照らし出される緑の葉っぱが、今はとても美しく見えました。

「あらあら、懐かしい景色ね」

「……ああ、そうだな」

近くでは、感動したように、目の前の景色を見つめる、コバとカルシの姿もあります。

これがビタミン星の本来の姿。

荒れ果てていた大地は、今ではとても鮮やかです。

「どうしても、綺麗だ、とん」

それを見てか、糸が切れたように、なしこまどんは意識を失ってしまいました。

アミノ星人も

「——うん、だもん？」

なしこまどんが目を覚ますと、見知らぬ天井でした。

「……こは？」

どうやらなしこまどんはベッドに寝かせてられているようです。

「——起きた！ なしこまどんっ！」

豪快にダイブしてきたノールに、なしこまどんはぎゅむと押しつぶされてしまいます。

「ノ、ノールちゃんどん？」

なしこまどんの上に覆い被さったノールは、笑顔でなしこまどんを見下ろします。

「もう、心配したんだよ！ 丸一日眠ってたし！」

「……そうだったどんか？」

「体は大丈夫？」

「大丈夫みたいだどん」

そう言い、なしこまどんは立ちあがろうとしますが、それをノールは手で静止させます。

「ダメだよ、なしこまどん、もう少し休んでて！」

「……ノールちゃんも同じことしたどんよね？」

「それはそれ、これはこれだよ！ うん、でも元気そうだね！ 待っててお父さんとお母さんをお母さんと呼んでくるね！」
バビューンと嵐のように、ノールは部屋を出ていきます。

「……相変わらず、元気どんね」

騒がしかった部屋が、シンと静まり返ってしまい、少し物寂しさを感じます。

なしこまどんは、もう一眠りと、天井を見上げた時——

「当たり前じゃ、妻の孫じゃぞ？」

天井に張り付くように、ノールが宙を浮いていました。

「うわ——だどんっ！」

なしこまどんは、驚き、ベッドから飛び跳ねました。

愉快そうにノールは笑い、ぐるぐるとなしこまどんの上空をぐるぐると回旋し、愉快そうに笑いました。

「驚いたのじゃ？ なしこまどん、いや、今は、ビタミン星を救った勇者といふべきじゃなっ」

「そうだった、したんだどんね？」

「うむ、大成功じゃ、こまで綺麗に事が収まるとは………本当に凄いのじゃ、良くやってくれたのじゃ」

褒められて、なしこまどんは、顔を赤くします。

「そ、そんなことないどん」

「……いや、本当に素晴らしいことじゃ……今一度、ビタミン星の長老として、礼を言わせて貰うのじゃ」

そういうと、ロールは地面に降り立ち、深々と頭を下げました。

「頭を上げてどん！ 頑張ったのは、わっちじゃなくて、皆んなだどん！」

「……だとしてもじゃ、なし」まどん、お主がビタミン星に来てくれなければ、この星は大変なことになってたのじゃ」

「違うどん、わっちだけの力じゃ、何にもできなかったどん……これは、皆んなで勝ち取った未来だどん」

「……なし」まどん、お主がこの星に来てくれて、本当に良かったのじゃ」

「わっちもこれでよかったどん」

あつという間の出来事だったというのに、なし「まどんは、なんだかとても長い間、ビタミン星にいたような気がします。

そして、トキドキハラハラするような連続でした。

ですが、未だ、解決していないことがあります。

なし「まどんは聞きました。

「セリン女王達は、どうなるどん？」

「……」一緒に、野菜と果物の整備をしてくれているのじゃ、野菜や果物が復活したとはいえ、今の状況は農業としては整っ

ておらぬのじゃ

ロールはそういうと、微笑み続けました。

「お主が言いたいことは、アミノ星人の故郷であるアミノ星が、どうにかならないか、という話じゃろう？」

なし「まどんは頷きます。

「きつと、ロールさんが協力してくれば、アミノ星もどうにかなるどん？」

「当たり前じゃ……じゃが、それは、ビタミン星の畑を耕してからじゃ……ちゃんと責任は取らないといけないのじゃ」

「……ロールさんは、とっても優しいどんね」

お別れ

宇宙船の前で、みんな集まっていました。

「よし、これでいいのじゃ！ 自動的に地球まで行くように設定できたのじゃ」

「ロールさん、ありがとうどん！」

なしこまどんは、母の形をした宇宙船を作って貰いました。

そして、今日、母の宇宙船に乗り、地球に帰る日です。

ですが、一つ問題がありました。

「嫌だよーなしこまどん、帰らないでー」

「じいちゃん……でももう、地球に帰らないといけないんだぞん」

なしこまどんは、神社の守護狛犬です。

長いこと神社を留守にしていたので、そろそろ帰らないといけません。

ですが――

「僕も連れて行つてよー」

なしこまどんは、泣きじゃくるノールが中々話してくれません。

「こら、なしこまどんさんにこれ以上迷惑を掛けてはいけないぞ」

コバラがいうと、ノールが言います。

「わがってるげどー、いやだよー」

「あらあら、すっかりなしこまどんが好きになっちゃったのねー」

「なしこまどんよ、お世話になったのじゃ……」

「こちらこそ、お世話になりましたどん！」

なしこまどんは深く頭を下げました。

「セリン女王も、さよならだどん」

なしこまどんは、笑顔で言います。

すると、セリン女王は微笑み、言います。

「いつの日か、また会おうぞ……おれもできていないのだからな」

「楽しみにしてるとどん！ それと、トリプトファンさん、お世話になりましたどん！」

「拙者も楽しませて貰ったぞ……一生忘れぬ」

と、順調にお別れをできていたのですが、やはり、ノールはなしこまどんから離れたくないみたいです。

「言っちゃだめえー、いやだよー、一緒にここに住もうよー」

「……ノールちゃん、きつと、また会えるどんよ」

なしこまどんは、ノールの肩を掴み、言いました。

「ほ、本当？」

「本当だどん！ なしこまどんとの、約束だどん！」

泣きぐずりながらも、ノールは。頷きます。

「……絶対だよ？ ぜーったい！ 約束ね」

「約束だどん！」

なしこまどんは、ノールの手を取り、強く言いました。

「……それと、ノールちゃんにプレゼントがあるどん」

なしこまどんは、枝豆のポシエットから、苺の髪飾りを取り出しました。

「ノールちゃん、苺が好きどんね？ それに似合っと思っ……よかったら、貰っでどん！」

ばあ、と、ノールの表情が明るくなります。

「うん、ありがとう！ 大切にするね！」

ノールはエヘと、苺の髪飾りを、つけて見せます。

髪飾りは、とてもよく似合っていました。

「よく似合っでいるどん！」

「……ありがとう、なしこまどん、僕、ずっと待ってるからね？」

「嬉しいどん！」

名残惜しいですが、なしこまどんは宇宙船に乗り込みます。

そして、宇宙船を起動させます。

プウン、と宇宙船が浮かび上がり、徐々に空に向かってきます。

「皆んな、楽しかったどん！」

なしこまどんは、窓から遠ざかっていく皆んなに手を振り続けました。

ずっとずっと、皆んなが小さくなっても、振り続けました。